

<論文>経営組織とワールドイメジ

著者	斉藤 弘行
著者別名	Saito Hiroyuki
雑誌名	経営論集
巻	22
ページ	37-59
発行年	1983-11-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005802/

経営組織とワールドイメージ

斎藤 弘 行

はじめに

今では経営活動、経営組織、経営管理などといったものがシステムの的に説明されることは常識になっているが、その場合に使用されるシステム思考が一体どのように理解されるかを考察しようとするものである。もとよりシステム思考それ自体は多くの文献のなかで語りつくされているわけだが、ここでは、ルーマンによる、「自己形成性」の概念を中心にしたシステム思考を紹介する¹⁾。

さらに、この「自己形成性」という我々にはなじみのない表現方法がどんなことを含むかを検討し、それが、「世界社会」の構想に連絡するかどうかを続けて考えてみる²⁾。この「世界社会」の考えも、誰もが唱える思想かもしれないが、やはりシステムの考えから出ているものだし、システムの自己形成性と何らかの関係があるのではなからうか、と我々は推測する。

これらの一連の脈絡のなかで、経営活動はどのように解されたらよいのか、経営組織はこの文脈のなかで果して説明できるのかどうかを考えることが我々の課題となる。経営組織がシステムの的に説明されることは今さら新しいことではないが、この「自己形成性」から「世界社会」への経過のなかで、経営組織もその通りになっているのかどうか、それともこの考えでは解明できないのかどうかを調べることにする。

およそ経営活動が一国内における活動のシステム性を超えて、世界のなかに拡大していることは、現実には、国際経営とか、多国籍経営などに表われている。しかし我々は、これらの現象そのものを説明するには知識が不足している。我々はこのような現象が、前述のシステム概念のなかで、どれほど抽象的に説明可能かどうかを試みるだけである。

自己形成性の意味と社会的システム

普通には、一般システム論の中心的な用語として、このような聞き慣れない「自己形成性」などというものにはお目にかからないようである³⁾。しかし、ルーマンに言わせれば、この用語がかなりの重要性を持つことになるので、我々もこの内容についていくらかの知識を得ることにする。

いうまでもなく、自己形成性の考えは、生物的有機体が有する特性のひとつであることには間違いないので、その点からみるととり立てて新しい考えではない。これをより一般化すれば多くのシステムは、内部的な活動と複雑化によって成長することはよく知られている。問題は社会的システムが主題となったときに果してどうなるかである。社会的システムは自然や生物のシステムとは異なるのだということを初めに考えておくことが大切である（しかし、これを別々にして考えることは、一般システム思考の本旨ではないことも、他方で注意しなくてはならないが）。

またここで無造作に社会的システムという用語を用いたけれども、それが「社会的組織」とはどう異なるのか、「組織としての社会的組織」という表現もあるが、それはどんなことを意味するのかという質問もでてくるに違いない。そこで、これら用語上の明快な定義をきちんと決めて、組織論が語られることはまずないと見てよいであろう。とするならば、我々はかなり自由にこれらの言葉を用いているし、またそれでよいことになる。事実、ルーマンにおいても、社会的システムということもあるし、社会的構造という表現もある。また社会的システムとしての社会という表示方法もある。

しかし我々は、かなり概略的ではあるが、出発点として、社会的システムの「ひとつ」の説明を聞いてから次の説明に移りたい⁴⁾。そのときに、「組織もしくは社会的システムを理解するに当って先ず問題となることは、そのロケーションとアイデンティフィケーションである」⁵⁾という文章に目を向ける。つまりそこでは初めから、組織といたり社会的組織といたりしてしまっているということである。

故にシステム自体の定義を別にすれば、生きたシステムとして組織を扱うならば、組織も、生物も同じだと見てよい。「生命のあるシステムは、生物的有機体であろうと、あるいは社会的組織であろうと、その外界に実際には依存している……」という陳述がこの事実を示している⁶⁾。

我々はこのような説明から、あたかもシステムという共通項をもって、あらゆる社会的組織的解明に努力するのだが、社会的システムが生物的システムと同一レベルで語られる可能性があるとしても、その内容には相違があることを知ろうとする⁷⁾。

(a) 生物的システムは物理的境界を持つが、社会的構造はこれを欠いている。生物的構造が土台としているものは物理的および生理的不変性である。社会的構造はそういうことに基礎を求めない。生物的構造のどれをとっても、位置が決まっていて、境界が明瞭なことを特色とする。

(b) 社会的構造（または組織）の場合には具体的な人間の世界に結びついている。そこには人間をはじめとして種々な物的なものが含まれるけれども、これらのエレメントは、自然におけるのとは違った相互作用をしているとみなされる。無理に自然的事象からの類推に拠ろうとすると誤解を招く恐れがある。要するに社会的システムのエレメント（もしくはサブ部分）の間の相互影響性は、生物システムの部分の間の関係のようには恒久性がないのである。

(c) 社会的システムは静止している状態を見ることは困難なことが多い。要するに、このシステムは事象とかできごとの構造が形成されているとみられる。エレメントがどんな機能をしているかを静止した時点でなく、経過として見ることによってシステムが把握されることになる。社会的システムにたいしては解剖学的思考はあまり得策ではない。その機能が停止したならもはや検討のしようもないのである（あるいは構造の確認がなされないといってもよい）。

上記のような社会的システムの特性を念頭に置くならば、次のような説明は容易に我々の賛成するところとなる。「社会的システムは本質的には考案されたものである。人間が複雑な行動パターンを発明したので、これを社会的構造と呼ぶ。また人間が社会的構造を創り出したということは、行動のパターンを規定することによってはじめて可能である。社会的システムの多くの特色はこの基本的事実からでてくる。人間の発明物の如く、社会的システムは不完全である」と^{7a)}。

さらにこの説明の補足として、社会的システムはこういう特性を示すものといわれる。つまり、それはいつばらばらになるか分らないのであり、そうかと思うと、もともと社会的システムの創造者なる人間よりも遙かに長く存

続するかもしれないのである。「社会的システムは人間の態度、知覚、信念、動機、習慣、および期待のなかに堅くつなぎ止められている」ということである。

これは、社会的システムが、心理（学）的様相を持つことを示すにほかならない。社会的システムが分散してしまわないのは、人間の精神的機能のためだというように理解してよい。それは組織の本質を表現しているものとみてよかろう。ここにおける関連様式は、個々の単位の恒久性が低いことを特色とする。それにもかかわらず、組織は存続する。この関係を表現したのが創造者の人間よりも長く続くということである。システムの恒久性を維持するのは、我々の単位でなくて、「単位の関連性」だとする。社会学的であるとか心理学的であるなどという表現を可能にするのは、このような単位（例えば人間）の心理もしくは精神的局面を強調していることにほかならない。組織には人の加入および退出が頻繁になされているにもかかわらず、存在しうることができるのはこのためである。

生物システムといえども、もちろん部分（もしくはエレメント）の関係があるけれど、この部分はかなりの程度安定していると認識される。安定しているという意味は、ひとつにはこういうことであろう。「システムそれ自体がたやすく確認されること、また、面と向って見て物的に判別がつくということ」である。それについて調べたり、研究したりするには都合がいいにきまっている。つまり、生物システムの境界がきちんとついていて、相対的に小規模なために、そこにあるのだという感覚によりつかまえられることである⁸⁾。

ところがシステムという言葉それ自体は、生物システムだけを考えるだけではないといった側面を含む。関係のパターンとは単に人間の感覚により捉えられるかどうか、部分の集合を人間の目で見極められるかどうかのことを言うのではないのは誰もが知っている。システムという言葉を使用するのは「概念的定義」のためであって、あるものがあるかないかの「言葉」ではないことを知らねばならない。システムの定義を用いないならば、輪郭の明確でない社会的システムを説明することはできないのである。正に、社会的システムはその位置の設定、境界形態、理解（我々の知覚のなかに意味のみでなく実在として知覚されること）が容易でないのは、生物システムとは比較になら

ないほどである。

かくて、我々は、この点につき次のようなまとめを得ることができる⁹⁾。

(a) 社会的システムは広範にわたる種々な目的のために考案され、その目的に間に合わせるようにつくられたものである。

(b) 社会的システムのどれひとつをとってみても、その生涯のうちで他のシステムとは異なった、新しい機能を自分のものにする。

(c) 社会的システムのエレメントは、生物的前提条件あるいは、生物的存在物をいくら組合わせてみても、その位置を決めることはできない。そのために、社会的システムとしての組織に統一を与えておくために、多くの制御メカニズムが加えられている。

(d) 制御メカニズムのなかに組織のエネルギーの多くが供給されるようになっている。つまり、組織それ自体のエネルギーがあると仮定することは、制御のメカニズムを通して確認されていることになる。組織のメカニズムは人間の行動の多様性を低くして、行動の安定した様相をつくり出すためである。

(e) 組織（社会的システム）のほうが壊れ易いし、長命だから、生物のシステムの様相をそのまま社会的システムにあてはめようとしてはならない。両システムの間の成長の程度が異なるという意味もこのなかに含まれる。

(f) 社会的組織は出現した当初は、内部的な資源または生活の方策を持つこともあるし、持たないこともあるから、生存し続けるかどうかははっきりしない。これに対して生物のシステムは成長のための資源および力が予めビルトインされているから、普通の条件のもとでは死ぬことはない筈である。

(g) 社会的システムはエレメント（または部分）をたやすく取替えて、無期限にわたって活動し続けることができるようにする。

そこでシステム思考を用いる意味はどこにあるかといえ、ある「囲みのあるシステム」の特色を示すためだといえることができる。組織論では、無限大に広がるシステムを考えているのではなく、程度のことは別にして（クローズドかオープンか）システムには「囲み」があることを前提にする。このなかでの構造と過程を明らかにするのがシステム思考である。だからこの思考は分析思考をあわせ持つことになる。それと共に、囲いがあるという意味が都市や国家、特定の（物理的な）工場もしくは会社（建物）のことを指している

のでもないことを記憶にとどめることが肝要であろう。

この点に関して、システム（または体系）の考えは古くからあったとしても、今日的意味のシステムは異なるのである。例えば体系について、「囲い」のあるものは、政治上の社会の仕組みであったけれども、この内容が現代に至ると、産業化された経済の局面によって代えられてしまっている。囲いのなかの内容が急速に変化しているのに、それを系統的に意味づけする手法がなかった。現実起っている事実を観察してどんな囲いの体系があるかを見れば、理論が形成されるという考えが先行していた。しかし、これらの現象はあくまで、社会文化的進化の部分に過ぎないのだからということが最近になって改めて認識されただけであろう。これに対して、あらゆる社会的システムにとって重要なことを考えようとするのがシステム思考ということになる。

社会的システムの自己形成性

システムがとくに社会的システムとして考えられるときに、自己形成性が特色とされる点につき、次のような説明がなされる¹⁰⁾。これは、システムの「意味のあるコミュニケーション」をもとにしたシステムのことである。そこで先ず社会的システムを形成するのは事象であり、行動である。しかしただ事象があったとか行動がなされているといっただけでは何のことか分らないし、まとまりのない領分にとどまっているに過ぎない。様々な事象の間の連結が必要である。様々な事象が連結されて、あるかたまりもしくはまとまりにならないと、我々の目にはある意味をなしてこない。その際に連結させるには、コミュニケーションがなくてはならないことになる。

システムがコミュニケーションを用いるということは、システムがそれ自体のなかで何か活動状態を保持していることを示唆する。コミュニケーションをなしていることにより種々の事象が事象だけにとどまるのではなく、ある変化が生じる発端を生んでいることを意味する。事象Aと事象Bとのコミュニケーションは、さらに事象Cを生じるといった単純な様相がいくつも重なっているのがシステム内部のプロセスである。この意味で、社会的システムが「自己形成的システム」と呼ばれるのは理解できる。

さらにこの内容を示すとすればこういうことになる。「社会的システムは、そのシステムのコンポーネントとして用をなす事象を再生することによりは

じめて存在する。それ故に、社会的システムは、それが自分自身で再生する事象、つまり行動から成立する。そして再生することができる限りでのみ生存する」と。

社会的システムを語るには環境のこともあわせて考えなければならない。「社会的システムの環境は他の社会的システムを含める」という陳述のなかに問題を見ることができる。もともとシステム思考は特定の国家とか、特定の政治、家族、社会などを指しているのではなくて、それらが共通の討議の場において問題とされることをねらう、いわば枠組的な考えであることは誰もが知る事実である。しかしここでいう「他の社会的システムを含める」は、政治的なものも、法律的なものも、経済活動的なものもすべて含まれるということではなくて、例えば経済的システムの環境は「他の経済的システムを含める」ことを言う。

それ故に経済的システムが別の法律的システムその他を環境としているとするというような言い方をしないのが、この場合の環境の意味である。しかしここで経済的とか政治的などという表現をしたけれども、システム一般を語る場合には許されていないこともまた正しい。したがって我々の意図する社会的システムは、特に名前をあげるもののない特定のシステムの同一種類の複雑性に目を向けていることになる。経営的活動が他の同種の活動を含めるときに環境が複雑になったということができる。

このときにコミュニケーションの役目は、社会的システムの間のことである。ということは複数のシステムが想定されていて、その間に同種の活動（もしくは思考？）が支配することが前提とされなければならない。そうでなくてはコミュニケーションはできない。社会的システムの環境は複雑であるけれども、コミュニケーションによって相互にiriみだれた関係にあるときに、そう言われると思ってよい。

社会的システムはこう見ると、そういうシステムが目の前にあって見えるというのではなくて（もちろんシステムは視覚的概念ではないが）ある事象なり行動がどうなっているかを見たり調べたりするためにあるのだと分ってくる。これを「オブザービング・システム」という。我々はこの点がシステム思考の本質を持つものと判断する。コミュニケーションがある枠の内部および外部でどのようになされているかを、いわば漸定的に静止的状态のなかで、見

ることを可能になるのが社会的システムの考えだということができる。別の表現をすれば、「自分自身と、自分の環境の間の区別のための、またそのために用いることのできるシステムであり、他のシステムを自己の環境のなかに（とり入れて）知覚する」ようにしてあるのが、社会的システムの思考方法である。

このあたりが生物的システムと異なるところでもあり、また社会的システムがその点で何か漠然としたものである点を持つことも確かである。そこでもう少し説明の次元を移してみると、「社会」という概念に行き当たる（次元を移すのがより高度になるのか、抽象レベルから離れるのかははっきりしないが）。すなわち、ここでは社会といっても、社会的システムから展開された社会であって、「社会とは、あらゆるコミュニケーションを含み、あらゆるコミュニケーションを再生し、またより以上のコミュニケーションのための意味ある範囲を形成する」というところの、囲いのある社会的システムである」ということになっている。

社会はこのときに、いわば最終的なシステム次元に到着していることに気付く。すべてのコミュニケーションを含むことは、既に外的関係が消滅している状態かもしれない。一体現実にはそういうことがあるかどうかを問題にしていけない。社会はシステムが次のスーパーシステムへと拡大する過程での停止点であるとするところができる。したがって、「社会が、環境との関係なしに、または外界的状况または事象の知覚なしに存在することをいう」ことは明らかである。「例外事例としての社会」が想定されていることになる。

それは、社会が、コミュニケーションを含むに際して意味ある内容を持つときに、一時的に（？）外界との関係を遮断したとみなしてよいかもしれない。コミュニケーションがそのような状態のなかではじめて、現実的内容を持つことができるのであるが、それを「システム内での循環」によるものということができる。これをシステムが「閉じている」と仮定するのはもうシステム論の初歩であろう。

何故にこのようなややこしい操作をするかと言えば、先程から語られた「意味あるコミュニケーション」が重要だからである、つまりシステムが過度にオープンならば、システムと外界の境界が不明確となり、どのようなコミュニケーションがなされるかが判別できないであろう。社会の中で「意味

ある」伝達活動が可能なのは、それがあつる範囲を飛び出していないためである。

結局、社会が具体的に含むものは「人間」であるが、「意味のある」という表現が、人間により理解可能な、人間相互の関係を示すのにほかならない。社会それ自体がコミュニケーションするのでなくて、人間がコミュニケーションする。そうすれば、環境は人間の存在によってより「意味のある」ものになる。故に、「システム（とくに社会的システム）はその外界との相互作用のために人間の身体と精神を利用する」という陳述が説得力を持つ。

システムはオープンであるが、囲いがある（閉じた特性）という矛盾した考えを前提にするときに、それを説明するためにコミュニケーションのアイデアを用いたのだが、完全な説明とは言えない。ただ、システム思考を展開すると、当然ながら社会の考え方に（社会の理論ともいっているが）至るとすることが、我々にたいしてあるヒントを与える。それは先ずシステムの考えが社会へと進展したときに、「我々は、社会の概念の定義のために政治的または経済的、市民的もしくは資本主義的指示物を必要としない」でよいことを思い起さねばならない。

我々は当然ながら、それぞれの国家のなかに生存するから、国家や、その経済体制のなかに否応なしに囲まれることになる。それが良いとか、好ましいかの議論は際限なく続くかもしれないが、システム思考の導入によって、その範囲を超えたところで、討議が可能になる。資本主義的経済を否定したり、国家体制の批判をしたりするのでなくて、「特定の事実にたいする偏見を回避する」ために、システム思考と採用することになる。

他方では社会の思考は、システムを逸脱して、現実味を帯びるとする批判はあるが、最終的には、社会システムの課題として社会の説明が具体的対象とならざるをえない。これについての手がかりとして、「社会は生活の事実である、つまり、人間はこの事実をもって生活する。そしてそうするためには人間は方向づけの方法として世界社会のイメージを生み出し、あるいは単にそれを受入れる」とする叙述がある¹¹⁾。

もちろんこれだけの文章では社会的システムの発展傾向だけがあるだけであり、どのような意味内容が含まれるかつまびらかでないが、「世界社会」のアイデアないしはイメージこそ、今後のビジネス・システムの方向づけを

示唆するものとみられるであろう。

社会システムの分化

我々は先の結論的表現に至るにはなお社会的システムのなかで、社会に関して（世界社会のイメージであろうとなかろうと）なお若干の説明を加えなければならない¹²⁾。およそ社会というレベルで思考してしまうと、特定の宗教上のコミットメントがどうか、生産方法がどうか、どのような政治体制かの様相を超えたところに問題点を発見することになる。「これに代わって、我々は社会的システムのタイプを内部的分化の方法によって定義する」であろう。

古代の社会はさしおくとして¹³⁾、現代の社会の分化はどうなっているのかを見る。すると、「ヨーロッパは中世では宗教、政治、経済の相対的に高度の部分を持っていて、次第に、この社会は機能的に分化したシステムへと進化してきた」というのである。システム形成の原理が地位から機能に移ったのである。

この場合に、無数のサブシステムとその外界関係が主な特色である。例えば、政治、経済、教育、その他の社会の機能がそれぞれのシステムとして存在している¹⁴⁾。そこでは、昔時のシステム観と異なるのは、「サブシステムの境界がもはや共通の領分上の国境によっては統合されえない」ことが大きな特色である。この場合に、政治的サブシステム以外はこの特色を強く発揮していることは、常識的に理解できるであろう¹⁵⁾。例えば経済的サブシステムは、一国の枠組のなかではもはやその機能を果しえないことははっきりしている。

それならば、境界が全く消失しているのかというと、別の考え方に基づいて説明しなくてはならない。それは、「意味のある境界だけがコミュニケーション活動の境界である」ということである。経済、教育などといったサブシステムのコミュニケーションは、いわゆるワールドソサイエティに拡大される傾向にあるのが今日の状況である。したがって、「資本の再生産のしかたが異なるとか、種々な国家の発展程度が異なるかなどということは、異なる社会を区別するための説得力ある根拠にはなっていない」ということである。

このようにしてコミュニケーションを主としてシステムの根底に置くとすれば、機能的分化がグローバル・システムを形成するのは間違いないかもし

れない。コミュニケーション・ネットワークの拡大を阻止することはできない。「すべての社会は、自分が伝達することのできるあらゆる事柄の領域の内部で、コミュニケーションをなす」と言いかえてもよい。したがってコミュニケーションできるとすれば、いくらでも拡大して行って最終的にはグローバルになってしまう。「あらゆる社会にとって暗に含められている意味は世界である」とする表現に賛成することができる。

もはやこの時にはひとつの社会的システムしかないといっても言い過ぎではない。ということは人間のあらゆるコミュニケーションが拡大して行って、換言すると、人間のコミュニケーションを含めることがひとつのシステムとして具体化してくることになる。これは人間のコミュニケーションがあらゆる領域に拡大可能だとするはなはだ楽観的な立場に基づくことも否定できない。コミュニケーションが意味あるものになるとは、このような人間の伝達活動が主役を果していることを示す。

ルーマンは上記の如く説明した後、現代の社会が、「ひとつのワールド・ソサイエティ」になるに当って、そこには次の如き2つの意味があると語る¹⁶⁾。(a)現代社会は、ひとつのシステムのために、ひとつの世界を提供する。(b)現代社会は、世界のすべての領域を統合して、コミュニケーション・システムの領域ならしめると。この2つの命題は、先程の説明のまとめである。(a)においては、例えば経済システムがひとつのワールドシステムになる事実は我々の体験するところである。経営活動はこれにあわせて組織化されねばならないであろう。(b)においては、統合されることは結局コミュニケーション・システムが形成されることであり、他に方法がないことを示す。経営活動は、世界的規模で考えると、所詮はコミュニケーションの問題のなかに集約されることになるであろう。具体的な例では、組織における人間相互の理解が拡大されて、グローバルな関係が形成されることである。

さて、分化について語るならば、必然的に統合が語られるけれども、我々はこちらでも統合の意味が従来の理解を超えていることを察知する。しかし、分化があるから統合しなくてはならないという意味で、統合について触れているのではないことも事実である。つまり統合が、アイデンティティ（の集合）とか、すべての人間が同一の価値をもつなどといった原理に支配されないことが大切なのである。国家的レベルで考えると、統合は、指導的な価値

をすべての人が確認し、それに従うことが強要される（相対的な程度の問題であるが）。

統合はあたかも素晴らしい手段または結果（？）のように見えるが、必ずしもそういうことではないとする主張を認めよう¹⁷⁾。先程から提示された自己形成的システムの内容を見ると、それが、エレメントの構成と、境界の設定を通してはじめて可能なことは既に触れた。このようなシステムのなかでは、分化がなされることについても語られた。

つまり、分化は、同一性に逆行するものである。情報伝達が可能になること、つまり情報を知覚しそれを処理する可能性を与えるのは分化であって、同一性（アイデンティティ）ではないことを知るべきであろう。もうひとつの問題点は情報や分化は、境界内で行なわれることである。囲いのあるシステムのなかでなければ、情報は伝わらないし、確実性はわずかである。コミュニケーションとはそういうことなのである。

このことは、システムと外界の認識をいやでも強くさせる。と同時にシステムが囲いのある存在なのだというときに、それは統合されているかどうかを意味していないことも知らねばならない。かくて、これらの内容を端的に示すのが次の如き陳述である。「システムと外界（環境）の間の分化の厳格さは、統合の程度（これがどんなことを意味しようとかかわりなく）よりも重要であるかもしれない。というのは形態形成的過程は、新しき構造を形成するためには、分化を使用するのであって、目標、価値もしくは同一性を使用するのではないからである」と。

およそ組織が形成されて行くのは常識的には統合や同一性が欠くべからざる条件（？）であり、しかも、統合なくしては組織はないように思われるが、この思考過程を破るのが、分化の思考である。人がコミュニケーションをよくすることは組織が発展することであり、形成が進化することである。だからといって、あらゆる事柄が平等に進行するとは限らないという厳正な事実もまた他にある。「現代社会は、とくに、生活条件の不平等の程度と両立できるのであるが、但し、この不平等によってコミュニケーションが妨害されない限りのことである」という表現は重要である。

この不平等の内容について吟味する余裕はないが、種々な意味に解釈されるところとしても、システムのエレメントがあらゆる場合に、同等ではないことを

初めから認めているとみてよいであろう。重要なのは、コミュニケーションが可能かどうかである。これが切断されるか、成立しない場合にはじめて、社会の存在が否定されることになる。不平等は道徳的には認められないが、システムの的には認められることになる（というのは我々は道徳論を行なっているのではないからである）。このところが現代社会を伝統的社会から区別する要点である。つまりコミュニケーションの存在はシステムの内部での「自己制御的過程」が機能していることを知らせるものである。

ワールド・ソサイエティと文化の標準化

社会的システムの思考を拡大すると、究極的にはワールド・ソサイエティの思考に至ることは、これまでの説明が指摘したが、我々は、もう少し、この関係を追究することにする。

初めに、こういうエピソードからグローバル思考の存在を知る¹⁸⁾。産業活動において、垂直的分業が産業化された国と産業化されない国の間に存在しているとする解釈（またはモデル）が、普通であったことは容易に分ることであるが、それだけでよいのかとする疑問も他方にある。今日、多国籍企業の内部での分業が存在している事実と直面すると、上記の垂直的分業概念では済まされなくなってくる。産業化の発展の度合いよりも、産業化とはもともとデペンデントなものなのだとする考えをしたほうが合理的なように思われる。古いモデルからの転向が必要とされることになろう。

経済的システムの例においてはこのように、システムの枠組が次第に拡大されていって、究極的なワールドシステムのなかで考えたほうが都合がよくなっている事実と注目したまでのことである。これは経済システムばかりでなく、他のサブシステムについても同じ考え方があてはまるであろう。またそれと同時に、グローバルな思考は複雑化と変化の知覚を我々にもたらすことも否定できない。これは一体どのように説明するのであろうか。つまり、システム思考により、ある意味では単純化の努力がなされると共に、現実には複雑な現象が広がっている事実と直面するとき、どのように考えたらよいであろうか。そのことを説明する文章は次のなかにある。「ワールド・ソサイエティの像は当然ながら、人が叙述しようとする現実の複雑性を低くする、しかし像の単純さは、つまり、そのエレメントの数を限定し、その内部的な

論理的統一性に制限を加えることは、正確さの保証にはならない」と。

我々は、この説明から、システム思考は無用とか、複雑性のためにアプローチを放棄するというのではない。そうではなくて、世界像の不正確さはあってもなおグローバル思考を援用することを主張する。その第1の表現方法のなかで我々はこのように聞く。「複雑性や変化が増大してくると我々の目に映ってくるものはマスメディアによって作り出され伝達された大量の情報にもとづくのである。マスメディアはこの場合、変化を強調し、予知不可能性の印象を強くさせるものである」と。

我々はマスメディアの作り出したものが駄目だから、逆にシステム領域を狭くして、そのなかでのみ思考しようというのでなくて、その内容がどうであろうと、もはや現状がこうなっていることをそのまま承認しなくてはならない。各々のサブシステムはもはや拡大的なサブシステムでなければやって行けないからである。

これに対して、我々の知覚は必ずしもばらばらではないこともある事実が認められる。それは、「世界にまたがる組織体によって生み出された標準化された情報およびネットワーク」があるからである。なにかんずく、各サブシステムが機能できるのは、サブシステムを含む世界的規模の組織体が形成されるようになったためである。この組織を通してみると、ワールド・イメージが形成されるようになると共に、統一のある像が表面化してくることになる。

その秘密はどこにあるのであろうか。それは世界規模の組織がもたらす情報のせいである。これは「制度化された世界文化の存在を前提にしている」からである。ここにいう制度化とは、管理支配の悪しき印象を含むのではなくて、誰もが理解し、受入れることのできる、一般化した事象、習慣、物、知識を指していると解してよかろう。それは先のマスメディアによって予め準備されたものである。成程、今日でもかなり、世界の風俗、習慣について異なった画像を見るけれども、それが何となく誤解されないで（誤解されることも多いが）済んでいる様相を想起してみるとよいであろう。

文化の標準化が進行しているのである。さもなければ、「世界的規模に標準化された情報は意味をなさない」ことになるであろう¹⁹⁾。特定の場所的な、システム内での情報を超えたところでの情報を利用し、また拡散させるのが、

世界規模の組織体であり、我々の関心領域においてはワールド・エンタプライズ、国際企業、多国籍企業である（世界的な広がり組織の代表は国連であるが、ここではそれに触れることはしない）。企業のみがそのような規模としてみられるのではなくて、他のものも存在するかもしれないが、今のところ十分根拠のある事例を提出することはできない。どちらにしても経営組織が文化の標準化に一役かっていることは事実なのである。

我々は先程、社会的システム思考が、国家とか、特定の民族の枠を超えたところでの討議を可能にすることに言及したのだが、それを展開したのがグローバル思考である。そのとき、グローバルの社会は、「相互作用の世界規模的領域があり、その最小単位は個々のメンバーである」ということになる。つまり、我々は個または個人から一気に、途中の制約的な枠構造を超えて、世界のイメージに飛躍することになる。これを具体的に負担したのが経済的経営のうちでも、世界的もしくは国際的経営といわれるものである。

我々はこのようにして世界的システムと個人の関係を知るようになるのだが、それについては世界文化の課題が深くかかわっていることもまた考えなければならない。以下についてこの関係を若干考察することにする²⁰⁾。

世界の規模で考えることは、「インターナショナル・システムもしくは政府間のシステムの概念よりも広範なもの」を意味する。しかしこの場合に、生活している個人は、依然として次のような2つの視点の間に存在していることには変りはない。すなわち、グローバル・システムのなかにいるとしても、そのメンバーは、国家的社会またはサブ国家的社会のメンバーとして行動しているのである。しかもそのような行動が表面上にでてくるのは、むしろメンバーが「より広い（外的な）世界」をより意識している場合だといってよいであろう。他方で自分自身の置かれている社会を眺めるときに、とかく自分の所属する社会層の観点を守ることにもまた事実である。

要するに絶対的に無国籍的に活動するワールド・ソサイエティのメンバーはありえないわけだが、そのことがグローバルのイメージを妨げていないのだとする主張が行なわれることに注目する。しかしその前に、我々の経験するところによると、ワールド・ソサイエティはあくまで想像上の事柄であるので、我々がそういった「社会のアイデンティティを共有した真の世界市

民」であることがありえるのかどうかの疑問も含めなくてはならない。この事実を分りやすくするために、グローバル・ソサイエティのイメージが生成すればするほど、かえってナショナリズムが普及する現象があげられよう。明らかにこの現象は奇妙であり、新しい(?)国際感覚に矛盾しないのであるろうか。

この点に関して我々の対象とした国際的企業はまた反面を持つことが知られる。「ワールドレベルにおいて経済的な不均合に橋渡しをする共通の文化は存在しない。反対に、そのような不均合は、国家的または地方的水準におけるよりももっと明白に、ワールドレベルにおいて知覚される」とする指摘がある。グローバル感覚もしくはイメージを形成する代表者としての経済経営(国際企業)がこれまでやって来たことは、確かに功績として認められるけれども、また他方で文化的な側面への配慮をかなり欠きながら、そのようなイメージを育成してきたことが知られるであろう。ワールド・ソサイエティになればなるほど、かえってカルチャー・ショックが強くなるといった事象を教えている。

しかしながらこの現象をもって直ちに個人がワールド・ソサイエティ・イメージを失うとか、必要としないなどといっているのではない。確かに一国のなかに生存する個人は、政治問題については個人ではどうにもならないことを十分承知している。その現象を見るならば、グローバル・イメージなどは存在しないことになる。政治問題は国家に委ねることが多いし、国家の得意とする分野には違いない。ところが個人は、政治意識に支配されたくない側面も持つ。つまり、ある個人が別の国家へ移住したいと希望する(亡命も含めて)ことがそれである。これは明らかに、国家の海外政策家の意図もしくは国家的利益と一致しない認識が個人のなかに育成されていることである。そのとき個人は国家の枠組を超えてワールド・ソサイエティに結びつく。あまり良い例とはいえないが、国際企業に働くことは、別の意味で、当該国家の政治体制を超えた環境に置かれることでもある。そのとき、グローバル・イメージは意識するかしないかにかかわらず出現すると見ることができる。

一般的には、相変らずワールド・イメージは明確ではない。個人は自己の労働条件と他国とのそれを比較したり、国家体制の比較をしたりするが、その程度ではワールド・イメージが確立されたとは言えない。これは多分に、

個人は自己の置かれている環境に影響されているせいである。さらに、ワールド・イメージの不明確性は、イメージの内容が大雑把な分類形式におちいつている点にも注意しなくてはならない。例えば戦争好きの国と、平和愛好の国、富める国と貧乏な国の捉え方などは良い例かもしれない。

なかんずくイメージが環境に左右される点に関して付言するとすれば、人は外国の政治体制よりもどうしても国内の事情に関心を多く持つことは否定できない。自己の身のまわりの事象により人間の意識が形成されることは社会化であるとは社会学の教科書の通りであろう。我々はかなりこの過程により、我々自身の見通しを形成される筈である。近隣の人たちに直接的関心を置くことがグローバル・イメージを弱くする。だからこそ、逆の現象として家族にたいし、また地域社会に、さらに国家にたいしての忠誠心がつくり出されるわけである。

国際的経営と称される領域において、ワールド・イメージとその弱化の関係を解明することはまだなされていない。すなわち、企業経営がグローバルとなり、また企業経営がグローバル意識をもたらすことにより、国家意識を超えたワールド・イメージが醸成される事実が一方にある。他方で、グローバルな企業は当然ながら、場所的にある国家の中に置かれ、そこに住居を有する人間により構成されざるをえない。その人間は当然ながら、自己の周囲にたいする関係が深く、またそのようにして成長して来た。企業がこの人間にたいして何らかの意味でのコミットを求め、さらにそれが深まった現象としての忠誠心（感情的、態度）を要求するようになるとすれば、一体どのように理解したらよいのであろう。

もう一度、この問題を取りまとめると次のように説明される。経営が各地に進出し、それはワールド・ビジネスとして、ワールド・イメージを形成する。他方で、経営自体は自己の活動をするために、現地における人間を（程度の差は別にして）採用し、その活動（労働という抽象性を超えて）に依存しなければならない。その人たちが経営により深くコミット（感情的にも、現実の労働においても）すればするほど経営の成績が上昇する。しかし、経営がその人たちにコミットメントを要求することは、既に、ワールド・イメージから離れることになりはしないかとする疑問である。

一方においては、ワールド思考を振りかざし、他方においては自己の狭い

領域の活動に人間（の精神）を制限することはどう解釈したらよいのであろうか。一体全体企業経営は、人間の忠誠心のようなものは不必要なのだろうか。そのようなものなしに、専ら、科学的にやって行けるのかどうか。我々はこのように次々に繰出される質問に正面から答えることができない。およそグローバルとかワールドという表現のなかには、どうしても場所的な制約から出ることのできないものを含んでいるのかもしれない。グローバルなものが、イメージとして存在するうちはよいかもしれないが、経営活動として、殊に、ある場所における生産ないしは業務活動として具体化されるときに、矛盾を含むことになる。

成程、ワールド思想は美事なものであるが、それが、経営活動のなかに具体化されるとき、上記のような問題点があるとすれば、我々の次の説明に進むことができない。とすれば、既に若干触れられた文化的側面への注目を思い出すのがよいであろう。「個人の持つワールドの見解は全体としてはぼんやりしたものであるけれども、近年、とくに、第2次世界大戦以降、世界文化が出現してきている」とする叙述のなかにある種のヒントを発見する。

我々は常識になっているのはこの種の現象がコミュニケーションの発達（とくに機械的側面での）に伴って、文化の伝播が異常に急激なことは第2次大戦後のことだということである。これは、伝達を中心となる機関としての企業、さらには、国連などの存在が大きな役割を果たしていて、そこでは、「世界的規模の社会的および経済的尺度の利用によって、ますます世界文化が制度化されてきた」のである。このようにしてコミュニケーションが先か、経済活動が先かの議論は別にすれば、先ずもって、世界的規模の組織が成立しないことにはいかなるワールド・イメージもでてこないという理解が得られる。たとえコミュニケーションがかなりの程度あったとしても、それを利用したのは、結局、グローバル・サイズの組織だからである。しかも、グローバルに活動されるコミュニケーションの内容は、社会的および経済的尺度もしくは指標なのである。

ワールド意識がこのような指標により育てられることは、別の見方からすれば好ましからざる事象かもしれない。しかし、我々はこの事象をもはや動かすことのできないほどに世界的広がりをもって、しかも人々の意識に入りこんだのがこの指標尺度である。それは、「文化が制度化された」ことを明

確に示す。この尺度で物を語るならば、相互の理解が進行し、また、もっと別の次元で見るならば、事象の解明はこの尺度によるものと決められていることになる。

経営活動が負担するのは（あるいは関係するのは）経済的側面であり、経済的尺度に関係するかもしれないが、社会的尺度から全く離れているとはいえないことも今日のビジネス社会では常識であろう。しかも、世界文化という名称のもとにイメージが創られてくると、経済的なものばかりが、文化ではないから、当然両者が含まれる。この際に世界文化は、もはや企業サイドからばかり眺められていないことを知らされる。それを語るのがこういう表現である。「この世界文化はある程度、個人に直接的に関連する。というのは、それは中産階級生活様式、もしくは別の言葉では、社会－経済的發展、また恐らく人間の権利の如き価値を含むからである」と。

経営活動には、必ず人間が、とくに西欧思想的に言えば個人が存在する。個人は、世界文化思考の拡散により、ますます、社会－経済的發展の恩恵に魅力を感じ、それかなくては生活できないものとして当然主張するに至る。経営のなかで個人を主張する程度が、世界文化の強化によりますます強くなるかもしれない。ワールド・イメージを持つことは、このような個人主張を強力に押し出すことかどうか俄かに判断できないが、理論的には確かにある（今、そのことがどう発展するか結論を出そうとするのでないが）。「このことは個人および社会的単位の実存的様相を示す。そして、必ずしも、政治体制の内的並びに外的目的と一致するものではない」²¹⁾としてまとめることができる。それは中間に存在する国家レベルを超えた考えだということだけは言えるであろう²²⁾。

このような文化的標準化の現象について、我々はいよいよ最後の言葉を聞く段階に入ったようである。我々はどちらにしてもワールド・イメージを持ってしまったことだけは明白である。経営活動はどのようにしても国家レベルを超えなければならない運命にある。しかし、個人がこれに関連すると、単純な説明に終ることはできない。個人が世界文化にかかわりを持つ意味を次のように説明することができる。「我々の当然のこととするのは次の事柄である。つまり個人は世界文化に関与する。しかしこの文化を主として地域的社会的構造のなかでの行動に適用する。例えば自分の子供を教育すること

であり、或いは大都市に移住することである」²³⁾と。

グローバル社会が人のイメージのなかに形成されとしても、現実の適用は異なることが分る。人はどのようなイメージを持とうとも、自分の都合のよい行動をとる。たとえ国際的経営が（現実）に存在しようとも、そこに働く人の具体的行動は異なることを示す。そういう意味で、経営行動における個人は当てにならない（ということは信頼できないということではないが）。例えば経営にたいする帰属意識、仕事状況への没頭、勤労意欲の向上（もしくはモチベーション）などといった課題は、かなりワールド・イメージとして、グローバル・ソサイエティのなかにある筈であるが、どの種類の国際経営においても、同じように、同じような程度に実施されているのではない。すなわち、「同じ圧力が異なる社会－経済的コンテクストにたいして行使されている」のが現実の姿なのである。

終りに

システムという用語はほとんど常識的に使用されていて、いまさら我々の解説する余地のないように見えるけれども、よく調べてみると、かなりの部分が未解決だということが分る。先ず、システムは、生物的システムと社会的システムと異なることは、かなりよく知られている。経営活動は後者の領域に属するけれども、そうかといって、一般的なシステム思考なしにはまた共通の討議がなされないとする矛盾を含む。

また、社会的システムは内部のコミュニケーション過程を通して分化が継続的に進行する。このことをシステムの自己生成性もしくは自己形成性ということにする。コミュニケーションとは人間のコミュニケーションが主体であって、これがあるために、システムが存続可能なのである。しかも、コミュニケーションを通して、何事かが生起しうるのはある程度囲いのあるシステム（極端にクローズドでないにしても）のなかでないと駄目なことも判明した。

この種のシステムの究極のものがワールド・ソサイエティである。これはいわば一時的に外界を捨象した存在であり、あたかも、もうそれ以上の外界はないものとみなしてイメージのなかのみ存在するシステムである。この思考が成立したのは、具体的にはワールド・エンタプライズ、インタナショナル・ビジネスの形成されたためである。しかし、コミュニケーションが先

か、グローバル・エンタプライズが先かの問題ははっきりした説明がない。また、このようなワールド・システムのなかでは、統合よりもむしろ機能的分化が重視されるのが特色である。そこでは道徳的意味を別にして、不平等のほうに中心が置かれる。

ワールド・ソサイエティは、具体的には企業経営の活動（または組織）と大いに関連する。いわば経営組織が負担するとみなすことができる。このほかに国連などの、世界的規模の組織がかなりの貢献をなしていることは否定できない。しかしワールド・システムを現実には稼働させているのはビジネス活動であることも真実である。

およそワールド・システムとして、たとえ人間のなかのイメージの存在にせよ、あるのは、世界の文化が標準化したためである。そうでなければある国における企業が他の国へと進出することはできない。これは別の表現をすれば文化の制度化である。制度化された文化のなかで人はますます国際的になるのは、つまりワールド（グローバル）・イメージを持つからである。

文化的内容については、殊に社会的－経済的指標が重視されるのが今日の状況である。これは、国連の統計などが主としてそれによって世界の状況を説明することに帰因すると共に、先にもあげた企業経営の本質が、いわゆる経済的経営なのだという証明でもある。しかし、個人のレベルにおいては、イメージとしては存在するが、現実としてはなかなかグローバルとはなりえない事実も他方にあることも否定できない。たとえば、経営のなかでの人間尊重がワールド・イメージとしてあるとしても、それぞれの環境のなかで異なる表われかたをする。さらに、個人は自分の都合のよい時と場所で、ワールド・イメージを使い分けるかも知れないから、当てにならないといえることができる。

今日の経営活動ならびに組織は、ただ経営とか経済といったキーワードを中心に考えていたのでは理解できないことが、上記の説明ではっきりした。我々は、それを超えるに、社会的組織（既に社会学で利用しているが、ここではそれとはニュアンスが異なっている）や、ワールド・イメージを通すことにした。したがって、これは国際的経営そのものの解説ではなく、経営組織が、何故、システムなのか、それがグローバル・イメージに結びつくのかについての若干のコメントなのである。

- 1) N. Luhmann, *The World Society as a Social System*, in: *Int. J. General System*, 1982, Vol. 8. pp. 131-138.
- 2) この思考は次のものから採用する。 *International Social Science Journal*, Vol. XXXIV, No. 1, 1982.: *Images of World Society*.
- 3) 例えば, F.E. Kast and J. E. Rosenzweig, *Organization and Management*, Student Edition, 1979, p. 102 において, 一般的システム論の主要概念をあげている。そこでは12の分類をあげているが, 自己形成性に合うものとするれば, Holism, Synergism, Organicism, and Gestalt かもしれない。しかしその内容を読んでみると, 自己形成性そのものではないことが分る。
- 4) D. Katz, and R. L. Kahn, *The Social Psychology of Organizations*, 2nd, ed., New York, 1978, を中心にして語られる。
- 5) Katz and Kahn, *op. cit.*, p. 18.
- 5) Katz and Kahn, *op. cit.*, p. 22. 組織かシステムかの議論などは問題ではなくて, 組織はオープンシステムとして考えられ, それは外界との関係において初めて理解可能だとする論述に移っていることを知る。
- 6) 以下について, とくに, Katz and Kahn, *op. cit.*, pp. 36-37.
- 7) とくに Katz and Kahn, *op. cit.*, p. 37-38.
- 7a) Katz and Kahn, *op. cit.*, p. 37.
- 8) Katz and Kahn, *op. cit.*, pp. 37-38.
- 9) Katz and Kahn, *op. cit.*, p. 38.
- 10) この説明については Luhmann, *op. cit.*, pp. 131-132 から引用する。自己形成性とは self-reference のことである。しかし, 別のところで, autopoietic system だとしているので, こちらの意味をとって上記の訳語を採用した。
- 11) P. Heintz, Introduction: a sociological code for the description of world society and its change, in: *International Social Science Journal*, *op. cit.*, p. 11.
- 12) この項の説明については, Luhmann, *op. cit.*, pp. 132-133 を中心にして語られる。
- 13) 社会文化的進化が, それぞれの部分のシステムから開始したことについて, Luhmann は触れている。分化のオーダーが高いとは, この場合, 家族とか集落における分化と異なって, 地位 (rank) に従った階層化が特色である。高度の文化を生むほどかなりの複雑性を生み出した伝統的社会は階層化された社会だという。それは, 「ヒエラルヒー的システム」だとする。このシステムは地域的基盤が異なることによって成立する。つまりどんな土地か, 都市かによってシステム構成程度が区別されている。この領界の考えがなくては社会システムは考えられない。とくに, Luhmann, *op. cit.*, p. 132.
- 14) それぞれのサブシステムが自分自身のシステムのなかでコミュニケーションをなすのであるが, そのときには, 自己の機能が (他の種類のサブシステムより

も) 優位にあるとする立場をとる。つまり、政治的サブシステムはその機能が優れたものと思うし (この表現は適切でないかもしれないが)、経済的サブシステムでは、その機能は、他の政治的ないしは教育的サブシステムよりも優位の地位にあるものとみなしている。その観点から自己のコミュニケーションを行なっているとしている。

- 15) 政治的サブシステムだけが、国家への細分化という地域的、場所的区分に合致する。そのほうが自己の機能を最適化できるからだとしている。とくに、Luhmann, *op. cit.*, p. 132.
- 16) Luhmann, *op. cit.*, p. 133. この2つの命題について、「現象学のおよび構造的意味の収束」だと表現する。
- 17) とくに以下について、Luhmann, *op. cit.*, p. 132.
- 18) Heinz, *op. cit.*, p. 12.
- 19) Heinz, *op. cit.*, p. 12 において、例えば、1960年代に世界に荒れまくった学生の暴動が存在したのは、世界の文化が標準化されている証明かもしれない。そのほかに、先進国における保守化傾向なども、一種の文化的標準化ということができよう。
- 20) Heintz, *op. cit.*, pp. 12-15 を中心にして語られる。
- 21) とくに、Heintz, *op. cit.*, p. 14. ここでは政治体制の目的に関し、内部的にはコンフリクトをうまくマネジメントすることであり、外部的には権力を行使することだとしている。
- 22) Heintz, *op. cit.*, p. 14 において、なお、別の尺度を提案しているが、我々は現在のところ、それを積極的に推薦していない。それによると、例えば、国内の所得配分、内部的なコンフリクト、犯罪比率、蛋白質消費量などが世界文化におけるある変化を指示するとしている。
- 23) とくに、Heinz, *op. cit.*, pp. 14-15.